
SHI-NO -シノ- After Story

むらき ひろよし

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

S H I - N O - シノ - A f t e r S t o r y

【Nコード】

N 2 1 8 3 U

【作者名】

むらき ひろよし

【あらすじ】

この作品はS H I - N O - シノ - のファンフィクションです。時間軸は僕が大学3年生、志乃ちゃんが中学1年生と、最後の事件があった時から1年が経過しています。

小説家になろうにはS H I - N O のファンフィクションがひとつもないので、じゃあ自分が書きちゃおう！と思い、筆をとることにしました。

まあでも所詮素人の書くもの、稚拙な文体や設定は御愛嬌。書いていくうちに改善できるよう努力したいと思います。

なので生温かい目で読んで頂けるとありがたいです（笑）

春 - 新たな出会い -

穏やかな日差しが降りそそぎ、優しく吹いている風が桜の花びらをふわりと舞わせている中、彼女は歩いていった。

俺が今年、これから入学する学校の制服、白いブレザーを着たその少女は腰まで伸びている黒髪を柔らかな風で揺らしながら静かに歩き、呆然と立ち尽くして自分を見ている俺の方をその黒い、吸い込まれそうな漆黒の瞳でちらりと見た後歩き去っていった。

その瞬間、俺は恋に落ちていた。

「支倉志乃です。出身小学校は……」

彼女、名前は支倉志乃というらしい、と同じクラスになれたのは僥倖だった。これは運命というしかないだろう。彼女の出身校は俺でも知っているエスカレーター式の有名進学校だったのでちよつと驚いたが、そんなことは些細なことだ。彼女の淡々とした自己紹介が終わった後も、その言葉ひとつひとつを頭の中で反芻することに没頭していると……

「おい、次はお前の番だぞ」

教壇の前に立っているこのクラスの担任、中肉中背で中年の中本先生が言っているお前が俺のことであるのに気付くのに少しばかり時間が必要だった。どうやら彼女のことを考えているうちにいつのまにか俺の自己紹介の番になったらしい。

俺は慌てて立ち上がり、どうやって彼女に俺の気持ちを伝えるか考えながら自己紹介を始めようとして……

「支倉志乃さん、俺と付き合ってください!!」

クラスの中に満ちていたざわめきが一瞬で消え、シーンと静ま

り返った。

……あれ、俺今何か言っちゃった……？言っちゃったよね……やべえー！頭の中で考えてたことが出ちゃった！？

一瞬音が世界から完全に途絶えたが、すぐに大きなざわめきとなつて戻ってきた。驚きながらも苦笑いしている先生1名。隣の奴とこちらを見ながら話している奴多数。はやし立ててる奴数名、そして俺と同じ学校だった奴らは呆れたり溜息なんかついてる。

いや、このさい外野のことなんかどうでもいい。問題は支倉志乃さんの反応だ。俺は急いで彼女の方を向いて、そしてそれに釣られて教室にいる全員が彼女の方を向いた。

彼女は公衆の面前で告白されたのにもかかわらず、俺が初めて見た時から変わらぬ表情を全く崩さず、何を考えているかわからない顔をしている。まあそんな表情も魅力的なわけだが……って何考えてるんだ、俺は……！？

と、脳内セルフボケ&ツツコミをしながら、俺は彼女のことをじつと見つめた。クラスメイトも、そして先生すらも彼女の答えを声も身じろぎすらもなく待っていると、徐に彼女は立ち上がり、短く一言、

「ごめんなさい」

とぺこりと頭を下げながら言った瞬間、俺の記念すべき通算10回目の告白は見事に玉砕したのであった……

自己紹介その他諸々が終わり、休み時間になった後も起き上がる気力が出ずに机にばったりと倒れ伏している俺の前に誰かがやってきた。

「お前も本当によくやるよな……」

俺の小学校時代からの悪友、林真が溜め息交じりに苦笑いした。

「これで告ったの何回目だよ？」

「幼稚園のころから数えると、記念すべき100回目だな」

俺が起き上り、胸を張って言うと、親友の真さんは何やら残念そうな目で俺を見る。

「はぁ……まあお前の一目ぼれ&即告白は小学校の頃から何度も見てたからわかるけどよ。いくらなんでも新学校、新クラスで速攻やらかすとは思わなかったぞ。唯でさえ前回の時は……」

そう言いかけて真は口をつぐんだ。

「いや、わりい。その話しはあんまりしたくないよな……」

「別にいいって。もう昔のことだし」

俺はへらへら笑って自分の心の一部にぽっかり空いているところが軋むのを感じながら誤魔化した。

「でもよぉ、お前つてもつと明るい娘とか胸でかい娘が好みじゃなかったつけ？支倉はどう見てもツルペタ根暗少女って感じじゃん？」

おいおい、仮にも初対面&お前のソウルブラザーである俺が告白した娘に対してその言い方はないだろ……

「ま、確かにかわいいし、髪もすんげえ綺麗だし、数年後が楽しみではあるな」

お前は中年オヤジか……

俺のツツコミに対して、真は表情を思案げな顔からニヤニヤ笑いに变えて、俺に尋ねてきた。

「で、お前はこれからどうするんだ？まさか一回ふられただけで諦めるのか？」

そんな悪友兼親友兼ソウルブラザー兼竹馬の友の言葉に、俺は不敵に笑って答えた。

「あの玉碎王桜木を超えた男である俺が、そう簡単に諦めると思うか？」

そう言っただけ俺は立ち上がり、彼女の元へと向かった。

春 - 新たな出会い - (後書き)

読んでくださってありがとうございます。

更新は不定期になると思いますが、気に入っていただけたor続きが少しでも気になったら、お気に入り登録お願いします。

01（前書き）

何だか意外と早く書けてしまったので短いですが更新します。

「支倉さんも災難だったねえ」

「あいつ一目惚れすると誰かれ構わず告白するから、あんまり気にしない方がいいよ」

「そう……」

支倉志乃の周りには人ばかり（100%女子）ができていた。まあ俺の告白があったからということが大きいのだろうが、彼女がわざわざ有名私立からこんな平凡な市立に来た理由や、体の小ささは真逆の大人びた雰囲気なども彼女達の興味を引いたのだろう。

質問責めにされている支倉はというと、見た目の人を寄せ付けなさそうな雰囲気とは裏腹に、質問されたことには全て短いながらもちゃんと「そう」や「特には」などと答えて意外にちゃんと話していた。

「支倉、ちよつといいか？」

「あ、あんた、いったいどういふつもりなのよ。いきなり告白なんてして！」

支倉の周りにいた女子の内の一人、小学3年からの付き合いの綾^あ香^{やか}が開口一番突っかかってきた。

「いやぁ……本当は学校の裏にでも呼び出そうと思ってたんだけど、ついっつかり」

「いや、あんたねえ。はぁ……」

呆れかえったように溜息について話しが途切れたので、俺はさすが支倉にもう一度尋ねた。

「で、ちよつといいか」

支倉は少し考えこむような仕草をしたが、すぐに小さく頷いて立ちあがった。

「かまわない」

「じゃ、ちよつと支倉を借りてくぜ」

「ちよつ、まだ話しは!」

綾香とその他が引きとめようとするのを無視して、俺は支倉の手を掴み急いで教室を飛び出した。

「で、話しは何?」

本当に学校の裏へ行くのは面倒だったので、とりあえず屋上に入る扉の前の踊り場（扉の鍵が閉まっていたため）に着いたあと、すぐに尋ねてきた。

「いや、まあさっきの告白の件なんだけど……」

支倉のあまりにも淡泊な言い方に、俺は緊張が解けて逆に少し啞然としながら本題に入った。

「なんで駄目なのかな? やっぱり初対面だからとかか?」

俺の問いに支倉はなにやらまた少し間をとり、そして簡潔に答えた。

「それもある。でも、それ以前に私には今現在付き合っている人がいる」

「えっ、そうなのか?」

俺は驚きの声を上げた後、さきほどの女子たちと同じように質問攻めした。

「もしかして、同じクラス?」

「違う」

「じゃあ小学校の頃の奴か?」

「違う」

「それじゃあ、まさか年上? 2、3年生とか?」

「……中学生という意味なら違う」

「じゃあまさか、高校生!?」

それはいくらなんでも年が離れすぎているだろう。案の定答えは「違う」

「じゃあ、大学生とか」

俺が苦笑しながら冗談で尋ねると、その時だけ今まで即答していた回答が返ってこなかった。

.....

つえ？なに、この間は……？

「さすがに大学生と付き合ってるわけないよなあ。あははは……」

しかし俺の笑い声は何の反応も示さない支倉の表情を見ているうちに尻すぼみになってしまった。

「いや、まさか、ねえ？」

「質問は終わり？」

「えっ？」

人形のように何もしゃべらなくなった支倉が急にしゃべりだした。思ったたら、俺の答えを待たずにさっと立ち去ってしまった。

「えっ？……っで、ええええええ！？」

俺の驚きの声が、誰もいない踊り場に響き渡った。

「で、なんでお前らまで付いてくるんだよ？」

俺は電柱の裏に隠れながら、後ろを振り返ってなぜか付いてきている真と綾香に尋ねた。

「なんでって、そりゃあオモシロそうだからな」

「あ、あたしはあんたが暴走してシノちゃんに迷惑かけないように見張るためよ！」

「ってバカ！大声出すな！」

慌てて綾香の口をふさぎ、ちらりとかなり離れて前を歩いている少女、支倉志乃の方を見た。どうやら氣付かれてないらしく、一定のスピードで歩いている。

「まったく、だいたいなんで尾行なんてしてるのよ？」

「そりゃあ……」

そう、俺は放課後になって、支倉が帰る後を付けることにしたのだ。彼女が答えなかった問いがどうしても気になり、その行動を見ていれば何かわかると思ったのだ。

「別にいいだろ。って、あ、ちよつと離れすぎた!」

俺は急いでこそそと次の電柱へと向かった。

「あつ、ちよつと!」

「あんまり慌てると見つかるぞ」

そんなことを言い合いながら、俺たちはこそそぞろぞろ支倉の後を追いつけた。

「ここか？」

「ここみたいだな」

角を曲がった先のぼろいアパートの階段をのぼりだした支倉を見て呟いた俺の問いに律儀に真は答えを返してきた。

「でも変ね。支倉さん家って結構良い所に住んでるって話しだったけど……」

女子はそんなことまで出会ってすぐに話すのか……

「でも、支倉はそういうことで見え張りそうなタイプには見えないけど?」

「確かに……」

俺と綾香が考え込んでいると、真が小さく声を上げた。

「おい、誰か支倉に手振ってるぜ」

向こう側の道から買い物帰りなのかスーパーの袋を片手に持った大学生くらいの青年が支倉に向かって手を振っている。それに気付いた支倉は階段の中ほどで立ち止まり、また降りて今までの一定の歩くスピードを崩し、彼の元へ小走りで駆けよっていった。そして何やら楽しげに話す男の手を支倉はしっかりと握った。

「兄弟とか？」

「んー……一人っ子って言ってたけど……」

二人にはさっぱり状況が飲み込めないようだが、俺には心当たりがあった。

「ん？おい、ちょっと。おまえ、まさか！？」

真が何かに気付いて俺を呼びとめようとするが、しかしもう遅い。俺は一直線に支倉達のところへ向かい……

「あれ、何かもの凄い形相で睨んでくる志乃ちゃんと同じ学校の制服の子がいるけど、知り合い？」

能天気にも少し驚いた顔をしながら支倉を名前で呼んだそいつはその瞬間有罪確定になった。

「この……」

「へっ？」

俺は渾身の力を込めて、そいつの腹目がけて拳を放った。

「ロリコンやろうがあああー！ってあれ？」

俺の拳はそいつに当たらず空を切った……どこかなぜか俺の視点は真っ逆さまになっていた。

そしてその後、ぐるんと一回転した世界はまた元に戻り……

「がはっ！？」

「志乃ちゃん！？」

俺の意識は後頭部に響いた痛みと奴の声を臍げに聞きながら、フエードアウトしていった……

01（後書き）

ツッコミや感想、誤字脱字等ありましたら感想の方にお書き頂けるとありがたいです。

「ん……うん……ここは……？」

僕の布団の上に寝かせていた彼が起きたのを見て僕は慌てて駆け寄った。

「あ、君、大丈夫？綾香ちゃん、真君、彼、起きたみたいだよ」

僕の慌てようとは裏腹にのんびりとした調子で綾香ちゃんが台所からやってきた。

「はい……あ、ほんとだ。やっと起きた。もう、いったい何がしたいのよ、あんたは……？」

「確かに、いきなり殴りかかるのは意外性がありすぎて逆に意味わからん」

ちゃぶ台の前に座ってお茶をすすっていた真君も一緒になって口々に問いたてられる中、未だにボーっとしている彼は頭に手をやって、

「いてっ！？」

と少し呻いた。

「はい、これ。頭冷やしなさい」

彼女が差し出した濡れたタオルを素直に受け取った彼は頭にタオルを当てること数秒、だんだん頭がはつきりしてきたのか、

「俺、何で……ってか、ここどこだ？」

「ここは僕の家だよ。君はなぜか僕に殴りかかってきて、それを志乃ちゃんに反撃されたわけ」

志乃ちゃんという言葉に彼はぴくつと反応し、そしてまるで初めて見るかのように僕の顔をまじまじと見て……

「……ああああ！？お前、ロリコン野郎！」

と叫んだかと思うと、またこちらに掴みかかろうとして……

「って、やめんかい！」

綾香ちゃんのツッコミの張り手がタンコブができているところに

クリーンヒットし、痛みで転げまわる少年。なぜかその姿にこちらに対して敵意を剥き出しな相手にもかかわらず、同情というか親近感を覚えてしまった。

「ていうか、お前さっきもこの人のことロリコンとか呼んでたけど、いったいなんでだ？」

それは僕も気になっていたところだ。真君がもつともな質問をすると、彼は僕をびしっと指差して叫んだ。

「こいつは支倉と付き合ってるんだ！昼間からさっきみたいにいやいやして、そんで夜な夜なあんなことやこんなことをしてるんだ！たぶん……」

最後の方は自信が無いのか尻すぼみになったものの、その言葉に、部屋の中がシーンツとなった。

えっと、彼は一体全体何の話をしてるんだ？

「お兄さん、純朴そうに見えて、鬼畜さんだったんですね……」

「さすがに大学生が小学生体型の中学生と付き合うのはまずくないすか……？」

綾香ちゃんと真君がじとーとした視線で見てるのに対し、僕はただただ混乱するばかりだった。

「それって、僕と志乃ちゃんが付き合ってるってこと？一体誰がそんなこと言ったの？」

「支倉が自分で言っただよ」

その言葉で、僕達は一斉に振り返り、いつもの部屋のスミッコにいる志乃ちゃんの方を見た。

志乃ちゃんは僕達の視線を一身に受けているのにもかかわらず、全く動揺せずにただ一言、

「いやいやしてないし、夜は一緒に寝てるだけ……」

「いや、そこを否定しても……」

僕が顔を引き攣らせながら呟くと同時に、彼がまた勢い込んでしゃべりだした。

「っていうか、やっぱり一緒に寝てるんじゃないかよ！」

「シノちゃん、もうそこまでしちゃってるんだ……」

「最近の中学生は進んでますなあ」

未だに起きてから時間が立っていない＆頭に血がのぼっている彼以外は完全に状況を楽しんでいる……その証拠に、綾香ちゃんは両手を顔に当ててきやーきやー言いながらも指の隙間から覗いている目が笑っているし、真君も顎と口に手を持ってきてもつもらしくふむふむと頷きながらにやにやしているのが丸わかりだ。

なんで僕の周りにはこう人をからかうのが3度の飯より好きなのばかり集まるんだろうか……

「はあ、不幸だ……」

これでは某不幸体質の主人公のセリフも出てこようというものだし、しかし、こういう時のお約束で、自分が不幸だと思つたとさらに不幸なことが降りかかってくるということを僕は忘れていた（まあ覚えていたとしても回避不可能だったろうけど……）

「じゃまするでえー!!」

ノックもせず勢いよく扉を開けて入ってきたのは、誰であろう鴻池キララ先輩だった。

「なんや、チビッコどもがいつぱいやなあ。シノシノの友達か？」

義足を付けているとまったく感じさせないほどスムーズに、ズラズラと何の遠慮もなく上り込むキララ先輩のことを見ながら、先輩も彼らのことをチビッコと言えるほど大きくないような……なんてことを心の隅で思った瞬間、先輩のボディীবローが僕の腹に見事に決まった。

「ほんと、学習能力つてもんがないんやなあ、あんたは」

腹を抱えて前かがみになってしまった僕にさらにヘッドロックを決める先輩。

「あんたのその思考ダダ漏れの表情を何とかせんと、そのうち痛い

目みるで？」

「げ、現在進行形で、あってます……って、ギブ、先輩、ギブです……！？」

気絶する少し手前でやつとキララ先輩は僕のことを解放してくれた。慣れたもので完全に加減を把握されている……

「けほつ、けほつ……で、先輩、今日は何の用ですか？」

今年から警察官になるキララ先輩がこんなところで油を売ってていいのだろうか？

「なんや、うちが用もなく来たらあかんのか？それとも、二人の愛の巢の邪魔をされたくないんか？」

「いや、別にそういうわけじゃ……って、また変なこと言わないで下さいよ！」

いつも先輩がここに来るのは事件のことばかりだったのでついつい勘ぐってしまふのだ。まあそれもこの1年間ほとんどなかったのだけれど……それより、今僕と志乃ちゃんのことを変な風に言われるのは非常にまずい。

「なにをそんなに慌ててんのや？」

キララ先輩の先ほどの言葉に、いきなりの闖入者に驚いて固まっていた彼がまた動き出した。

「って、やっぱあんたと支倉はそういう関係なんじゃねえかよ！」

「ん？なんなん、このぼうず？」

キララ先輩は彼のことをじつと見た後、続いて少し離れて状況を見ている真君と綾香ちゃんに視線を向け、最後にいつもの定位置にいる志乃ちゃんの方を見て考え込むこと数秒、キララ先輩の並外れた状況把握力がここで今何が起こっているのかを導き出したことをその後のにたあーっという表情が示し、僕は状況がさらに混乱することを覚悟させられた。

「つまり、あんたはシノシノのことが好きで、シノシノとこいつの愛の巢に殴り込みをかけたっちゅうことか」

「……っていうか、そもそもあんただれ？このロリコンが先輩とか

呼んでたけど、まさかそのなりで20歳超えて……って、いてててて！？」

「な・ん・か、今お姉さんに言っただけかなあ？」

先ほどの僕と同じようにヘッドロックをかけられた姿は、なぜだかクロス君の姿を思い出された。

僕はとりあえず、これから僕、クロス君に続き、先輩のおもちやになるであろう彼に静かに黙祷を捧げた。

「って、お前ら、見てないで助ける……っていうか、助けてくれえ！？」

彼の悲痛な声はキララ先輩が満足するまで続いた……

「何だか、色々あった1日だったね」

僕がよそつたご飯を志乃ちゃんに運んでもらいながら、ため息交じりに呟いた。

あの後キララ先輩の愛人発言でさらに混沌と化した場を終わらせたのは同じ階に住んでいる女性の「うるさい」の一言だった。その後あやふやに解散することになり（彼は綾香ちゃんと真君に引きずられていった）、キララ先輩もただ単に僕たちの顔を見に来ただけらしく、すぐに帰ってしまった。

「でも、よかったよ。志乃ちゃんにも友達ができたみたいで」

食事の用意が終わったちゃぶ台に座った僕に対して、志乃ちゃんは短く、

「そう……」

と呟いた。

彼女は人と人が本当の意味で分かり合えないことを知っている。

昔はそのことから他人を拒絶しないまでも積極的に関わろうとしなかった。それが今では（理由はともかくとして）家に来てくれる子までできたのだ。

本当は記念においしいものでも作るべきなんだろうけど、あいにく1年前からほとんど進歩していない僕の料理の腕ではいきなり御馳走を作るわけがなく、今日もいつもと同じような献立だ。

「でも、なんで僕のことを彼氏とか言っただの？」

そう、たとえ断るにしても、もっと上手い言い訳があっただと思うのだ。というか志乃ちゃんがもつと穏便に済ます言い方を知らないはずがない。

「迷惑だった？」

「えっ？」

まじまじと見てしまった志乃ちゃんの顔はいつものごとく表情が分かりにくいものだったが、今回は自称シノシノティマーである僕が見ても読みにくい、というかあまり見たことがない表情だった。「もしかして、拗ねてる……？」

いや、そんなわけないだろう……と脳内でセルフツツコミを入れながら苦笑いして、頭を切り替えて本題に入った。

「いや、志乃ちゃんのことだから何か考えがあるのになって」

「そう……」

あれ、間違えた？でもおかしい。いつもならもしトンチンカンなことを言ったら、あのどんな人だろうが惨めにさせられる視線を投げかけてくるはずだ。なのに志乃ちゃんはこちらから視線を外し、ついているテレビを見だした。

「なにか気に障るようなこと言っちゃった？」

「別に……」

んーこれはまずいかもしれない……こうなると頑固な志乃ちゃんも梃でも動かない。

どうしようかなと迷いながらも、空腹に抗えず、冷めてしまうのも勿体ないので食事にとりかかるところにした。

ぴちよんっ、ぴちよんっ……

しっかりと閉まっていない蛇口から水滴が一定の間隔で滴り落ち、メトロノームのような正確さでリズムを刻んでいる。

俺はそれを止めるのすら億劫で、湯船に体を沈めながらぼーっとしていた。普段はカラスの行水並みの速さでさっと入ってさっと出るのが俺のスタンスなのだが、考え事をするときにはつい長風呂になってしまう。

その考え事とは勿論支倉志乃のことだ。真と綾香に引きずられて帰った後、一人になって初めて俺がどれだけアホなことをしたのか自覚した。

考えてみれば、中1が大学生と付き合うなんてありえない。普通ならそんなこと冗談だと思うか、マセガキが年上に憧れて妄想していると考えるくらいだ。

いくら支倉がそういう類の冗談を言いそうにないにしても（マセガキの方は……ありえないだろ）普通は最初にその言葉を嘘と思うだろう。

ではなぜ俺が支倉の後を付けてまで確かめたかったか、それは先ほど頭の中で並べた常識を通り越して、なぜだか信じさせる雰囲気彼女が孕んでいたからだ。

さらに、あの大学生。見た目はただの平凡な、どこにでもいそうな普通の一般人A。映画やドラマだったら通りすがりのエキストラ程度の役割しか与えられそうにない人相。

なのに、あのロリコン野郎はどこか似ていた。俺が初めて本気で付き合ったあいつと……もう、会うことのできない、あいつと……

一瞬ロリコン野郎の顔にあいつの面影が重なり脳裏を過ったが、すぐに俺はそれをかき消すように掌でお湯を掬い、顔にばしゃんっ！勢いよくかけた。

「はあっ、はあっ、はあっ……」

僕は薄暗い闇の中、駅へと続く大通りのど真ん中を走っていた。普通ならどんな時間帯でも最低数台は走っている車は影も形もない。歩道にも人影はなく商店街の店もからっぽで、まるでゴーストハウンのようだ。

「いったい、どうなってるんだ……？」

誰も答えてくれる人がいないとわかっていても、呟くにはいられなかった。人がいないというのもあったが、さらに薄気味悪いのが大気を満たしている紫色がかった薄い霧だ。こんな現象は初めて見た。

まさか自分は異世界に来てしまったんじゃないか、そんな突拍子もない考えが浮かんでは否定する、そんなことを脳内でもう何度も繰り返している。

「僕は……」

息が切れてその場でぜえーぜえー言いながら立ち止まる。そしてその行動はものすごく幸運なことだった。

ズドーーーーーッ……！！

「わぁーーーー！？」

目の前に何かが落下した衝撃で、僕は数メートルは吹き飛ばされた。運よく怪我をしなかったらしく、体はちゃんと動き、しかし粉塵が消え前を向くとそこにはその場で死んでいたほうがよかったんじゃないかと思わせるくらい絶望的な存在がいた。

「りゅ、竜……？」

そう、僕の目の前にはファンタジーの悪役やラスボスで出てきそうな禍々しい姿をした1匹の巨大な竜ドラゴンが紫電をまき散らしながら立っていたのだ。竜の着地したところは地面が数メートルはクレータ1状に陥没していて、もしあの時立ち止まっていなかったら確実に

死んでいただろう。

いや……

「もしかすると、ぺちゃんこになってた方が楽だったかな……？」
僕は恐怖で思考が停止し、金縛りにあつたかのように指一本動か
せず、こちらに気づいた竜が突っ込んで来るのをただ見ていること
しかできない。

そして竜の顎^{アギト}が僕を噛み砕こうとした瞬間……！

「防御」

「Protection！」

僕と竜の間に黒い小柄な人物が割って入り、突き出した杖が黒く
輝く円盤状の物を出して竜の突撃を弾き返した。

弾き返した衝撃が突風となり、硬直していた僕を打ち、尻餅をつ
かせる。

「……もしかして、志乃ちゃん……？」

呼ばれて振り返った人物は、まさしく支倉志乃その人だった。し
かしその姿はいつもの志乃ちゃんとはかけ離れたものだった。

まず服が黒を基調にした魔法少女が着ているような、普段着とし
てはかなり着ているのに勇気があるデザインで、手にはこれまた機
械的な魔法の杖っぽいものを持っている。

それでも、吸い込まれそうな漆黒の瞳や感情の起伏の少ない顔は
まさしく志乃ちゃんそのものだった。

「離れてて……」

「え、あ、そ、そうしたいんだけど、腰が……」

志乃ちゃんのことを見上げながら体を動かそうとしたのだが、体
がまるで自分のものじゃないかのように言うことを聞いてくれない。
そんな僕を志乃ちゃんは見つめること数秒、深い、物凄く深いた
め息を一つついて……

「移動させて……」

「A r i g h t , M a s t e r ! R e m o v e !」

「えっ？つて、ええー！ー！？」

杖が光を帯びたと思うと、僕の体がふわりと浮かび上がり、近くのビルの屋上へと運ばれていく。人生初の空を飛ぶのがまさか飛行機ではなく魔法では……

我ながら妙な経験だけ蓄積していくな……と、どうでもいいことを考えながら、眼下で行われ始めた戦闘を見始めたのだが……

「吸収」

「Absorb!」

竜が纏わせていた雷があつという間に志乃ちゃんの持つ杖に吸い込まれていった。

呆然とする竜に対し、志乃ちゃんは淡々と杖を向ける。

「スタンガン……」

「OK, Master! Mode Stungun!」

漆黒の杖がガチャンガチャンと変形していき、巨大な黒光りするスタンガンへと姿を変貌させた。

後ずさり、空へ逃げようとする竜に、志乃ちゃんはたった一度の踏込で相手の懐へと潜り込み、一言

「放電」

と呟いた。

「Kill it!」

杖が答え、そして竜は自らが纏っていた雷を数倍以上の威力にされたものをもろに喰らった……

「志乃ちゃん、いったい何がどうなってるの……?」

「あなたが知る必要はない」

竜を倒した後、僕がいるビルの上までふわりと飛んできた志乃ちゃんは僕を一瞥すると、徐に杖を構えた。僕の方に向けて。

「えっ……?」

「あなたには関係ないこと。よって、あなたの記憶を消します。」

「ちよつ、ちよつと待つてよ、志乃ちゃん！？そんな、本気じゃないよね……？」

しかしいつもならどんなにわずかな変化でも読み取れる自信があるその表情からは、意図的に感情を隠しているとは思えないくらい何もわからなかった。

「記憶を消……」

そして志乃ちゃんが僕に向かって杖を振ろうとしたその瞬間！

「ちよつとまちいやー……！」

志乃ちゃんの後方、ビルの乱立している場所から、一つの人影がビルの屋上を飛び跳ねながらこちらに近づいているのが見えてきた。最後にビル2つ分ほどの間隔を一気に大ジャンプをして僕たちがいるビルの上に飛び降りたのは……

「キララ……先輩……？」

赤いロングコートに黒い戦闘服を身に纏っていたのは紛れもなくキララ先輩だった。そして先輩のただの棒のようなものだった義足は機械的なものになっていた。

「まさか、鍊金……？」

「シノシノ、あんたこの状況でまだこいつに隠し通すつもりなんか……？」

キララ先輩が赤いマントを吹きすさぶ風にはためかせながら、真剣なまなざしで志乃ちゃんに問いかけた。

「この件に関しては、彼は知らないほうがいい……」

「うちはすべてを話した方がいいと思うんやけどなあ」

どちらか一歩も自分の意見を譲らない様子（そして何が起きているかわからない僕は完全に蚊帳の外だ）

「どうしても邪魔をするというなら……」

「実力で排除するっていうんかい？」

臨戦態勢に入る二人とも。そして僕はというと、情けないことに声の一つも出せない。

「それじゃ、いくでえ！」

徐に胸に手を当てたキララ先輩。そして胸元が赤く輝いたかと思うと、六角形をした銀色の物体が掌に収まっていた。

「武装 金！」

「って、それ錬金違いじゃっ!？」

がばっ!、と起き上がると、そこは僕の部屋だった。そしてDVDプレイヤーが繋がれたつけっぱなしのテレビとあるアニメ3期のDVDのメニュー画面を映している。

「……夢？」

寝起きの頭が覚醒していき、だんだんと状況が呑み込めてきた。

「そっか、昨日借りたんだっけ……」

そう、昨日志乃ちゃんが珍しく両親が家にそろっているそうなので、久しぶりに家に一人だったのだ。で、志乃ちゃんが帰った後同じアパートに住んでいる女性に以前から見ると約束させられていたアニメのDVDを借りたんだった。

なぜ僕がそんな約束をさせられたかはまたの機会に話すとして、とにかく感想とかも言わなくちゃいけないので昨日は夜中ずつと見ていて、どうやらそのまま寝落ちしてしまったらしい。

しかし……

「なんてものを見たんだ、僕は……」

ふっ、と少し笑いが込み上げてくる。

志乃ちゃんが魔法少女って、どんな設定だよ。そりゃあ彼女はあいう服が似合いそうだけど（というかどんな服でも似合うのだが）ありえないでしょ（笑）

そんなことを考えながら、志乃ちゃんが確か朝来るといっていたのを思い出し、立ち上がって朝食の支度をしようとしたら……

「……………」

ありえないものが目に入ってきた。

「おはようございます」

そう、部屋の隅っこ、その志乃ちゃんのいつもの定位置に志乃ちゃんその人が体育座りをしていたのだ。まあでも志乃ちゃんは家の鍵を持ってるし、そこにいること自体はおかしくない。ただ……

「夢なのに、夢じゃなかったぁー！ー！？」

そう、志乃ちゃんは魔法少女の格好をしていたのだ。

03（後書き）

作中で僕がリリカルでマジカルというセリフを知っていたのが不思議だったので、この一幕を入れてみました。

志乃ちゃんが某魔法少女、キララ先輩は某チビ錬金術師と見せかけて錬金の戦士というわけのわからない設定でしたが、まあそこはファンフィクションということで気にしないでください（笑）

本当は真白ちゃんやクロス君も出そうと思ったんですが、これ以上やると収拾つかないようなので、彼らの出番はまた後になります。

次回更新は書きかけの作品がなんとか形になったので、来週中にはできると思います。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、たんのう堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2183u/>

SHI-NO -シノ- After Story

2011年7月10日03時50分発行